

東北大学出版会 会報

第 38 号

宙

おおぞら

〒 980-8577
仙台市青葉区片平 2-1-1
TEL 022-214-2777
FAX 022-214-2778
www.tups.jp
info@tups.jp

2025 年 10 月

自著を語る



α 星

『豚肉の生産科学』

鈴木 啓 一

NHKのテレビ番組「魔改造の夜」は、エンジニアたちが技術と創意を競い合う異色の開発バトルだ。私は毎回、楽しみに視聴している。おもちゃや家電、日用品を大胆に改造し、走行時間や飛距離を競う姿は実にスリリングだ。時には物理学の法則を巧みに活用して目標を達成するチームもあれば、思わぬミスで自滅する場面もある。その泣き笑いに、視聴者として思わず引き込まれてしまう。だが、振り返ると成功にも失敗にも、必ず内在する原因があることに気づく。これは私自身の研究

にも通じる視点だ。

自著『豚肉の生産科学』の表紙を飾る豚肉の写真は、私たちが宮城県畜産試験場で開発した系統豚「しもふりレッド」である。この開発では、雄豚一五頭と雌豚五〇頭を交配し、生まれた子豚約四〇〇頭のうち一部の八〇頭を屠畜してロース部分を分析。筋肉内脂肪（IMF）や肉の軟らかさ（Tenderness）を測定し、統計遺伝学的手法により全頭の遺伝的能力（育種価）を推定した。そして能力の高い個体を選抜し、次世代の育種を行う。この選抜と交配を七年間、七世代にわたって繰り返して、筋肉内脂肪は初期の三・五％から五％へと向上した。脂肪交雑、いわゆるマーブリング（霜降り）の度合いで「サシ」とも言われる）は、まるで芸術作品のように美しい。

改良成果を発表する披露試食会では、宮城県知事らの

前でその味を評価してもらい、結果は期待以上だった。私たちが用いた改良手法は一九七〇年代に確立された基本原理に基づくが、その後のコンピュータ技術やソフトウェアの進化が、精度を飛躍的に高めた。前述書の第6章ではその詳細な経過を紹介している。特にマープリングの改善は、見た目でも一目瞭然で、累積選抜差の変化から改良の成果を実感できる。育種改良の原則、すなわち「改良量＝選抜差×遺伝率」に従い、毎世代確実に選抜差を積み重ねてきたことが成功の鍵だったと考えている。

「しもふりレッド」は市販もされており、他の豚肉と比べて脂肪の量や肉質の軟らかさに明らかな違いがある。豚肉のおいしさには、軟らかさ、適度な脂肪交雑、多汁性が重要だ。統計遺伝学的手法による改良は有効である一方で、実践の現場では、食品残渣のパン屑など、タンパク質やリジンが少ない飼料を与えることでマープリングが増えることも経験的に知られている。『豚肉の生産科学』の表紙の豚肉は、食品工場で廃棄されたハルマキなどを利用して飼育されたもので、マープリングが一段と際立っていた。こうした低タンパク・低リジン飼料とマープリング増加の関係については、同第8章で詳

述している。

自著出版後には、複数の講演依頼もあった。この三月には愛知県獣医師会からの依頼を受け、同第10章に新たな研究成果を加え、「豚の疾病や衛生管理ストレスが肉質に及ぼす影響」と題して講演を行なった。豚が疾病に罹患すると、血中の免疫応答により筋肉内のグリコーゲンが減少し、結果としてpHが下がらず、肉色が濃く、パサつきやすくなる。これにより肉は硬くなり、うま味のもとであるイノシン酸 (IMP) も減少してしまう。つまり、健康に育った豚こそが美味しい肉になるというわけだ。

食肉とは、死後の筋肉であるが、その質は遺伝的能力と生育環境の両方に大きく左右される。近年の研究では、うま味成分であるイノシン酸の重要性が明らかになってきた。その前駆体であるアデノシン三リン酸 (ATP) は、エネルギー代謝において中心的な役割を果たすが、イノシン酸の生成メカニズムやうま味との関係には未解明の部分も多い。

最近では、家畜の生産コストや環境負荷の観点から、細胞培養肉が注目を集めている。しかし、遺伝的改良や飼養管理の工夫によって生まれた、多様な食感と味わい

を、今後の動向を注視していきたいと考えている。

（すずき けいいち：宮城大学客員教授、東北大学名誉教授、専門・動物遺伝育種学、一九七九年東北大学大学院農学研究科博士後期課程修了）

鈴木啓一著
豚肉の生産科学



「おいしい豚肉」の科学的根拠を知る。
豚肉のおいしさを理解するための、
組織科学的な仕組みと遺伝学・栄養学的な背景。

組・組織・科学的な仕組みと遺伝学・栄養学・科学的根拠を明らかにする一冊。

A5判・一六二頁 二九七〇円(税込)



日本才カルト史研究への

いざない

オリオン・クラウタウ

二期目に入っていた米国の共和党大統領は、政府機関を私的に動かしたとしてメディアの集中砲火を浴びていた。中東では、アラブ諸国がイスラエルの占領地奪還を狙って奇襲を敢行し、イスラエルもただちに反撃、戦火は拡大していった。一方、日本では物価高に揺れるなか、自民党の首相が構想した経済改造計画のシナリオが、思わぬ国際危機の波にのまれて頓挫した……これらは現在ではなく、すべて一九七三年のことだ。

この一九七三年に、新潮社からある訳書が刊行された。タイトルは『オカルト』で、著者はイギリス人作家のクリン・ウィルソンである。彼は一九七一年発表の原著において、「オカルティズム」の歴史をたどりながら、「未来の科学」としての魔術や人間の「潜在能力」を語り、結論では、当時の世界が抱える精神的問題から脱却する方法として、我々誰しもが持つ「X機能」の發揮を提唱した。この書の日本でのインパクトは大きく、例えばそ

の発表を境に、「occult」の訳語として一般的だった「秘教」という言葉は、カタカナ表記の「オカルト」に圧倒されていった（拙稿「古代の声、オカルトの姿」『歴史学研究』二〇二五年七月号）。

もちろん、これほどの反響が生まれたのは、それなりの社会的背景があったからである。後に阿含宗を創設する桐山靖雄の著作が人気を博していた他、ウィルソンの訳書刊行から約半年後には、東北大学法学部出身の五島勉による『ノストラダムスの大予言』が出版され、前例のない売れ行きを記録した。このような書籍が次々にヒットする状況を受け、当時のメディアはこの現象を「オカルト・ブーム」と呼び、その枠組みのもとで、前近代の日本思想や宗教が従来とは異なる語り方をされるようになった（韓相允「1970年代の日本における「オカルト」概念の受容と展開」『学際日本研究』一、二〇二一年）。

しかし、これらの社会現象に関する歴史叙述は、長らく当事者を含む在野のノンフィクションライターによって担われ、真正面から取り組む大学所属の研究者は驚くほど少なかった。なぜそうだったのかには様々な理由が考えられるが、研究の停滞を決定づけたのは、やはり

一九九五年のオウム真理教による地下鉄サリン事件であった。以降、高度経済成長期から展開していた「オカルト的なもの」への関心は、事件を生み出したであろう「黒い前史」として位置づけられ、研究そのものが一種のタブーと化してしまった。この「オカルト」への新視点が生まれ始めるのは、ようやく二一世紀に入ってからのことである。

この動きに大きく貢献したのは、横浜国立大学の一柳廣孝に加え、日本の「オカルト」を真にグローバルな視野から捉え、他国の類似現象との関係においてネットワーク論として展開させた吉永進一（一九五七―二〇二二）である。京都大学出身の吉永は特に、「オカルト」という言説枠で語られてきた様々な事象を、「怪しげなもの」への社会的視線と捉え直した――つまり、「オカルト」がすでに「怪しい」ものと見なされている世界において、人々がなぜ、そしてどのようにしてそれに魅了され、かつ社会的認識に逆行する形でいかにその関心を表現していくか、という観点を示した（I・ガイタニデイス「オカルティズム研究の方法論的課題」『近代仏教』第三一号、二〇二四年）。しかも、それは決して日本固有の現象にとどまらず、近現代世界を象徴する

極めてパワフルな表現形態だと、吉永は捉えたのである。二〇二〇年に E A N A S E (東アジア秘数学術研究ネットワーク) を設立した彼の理念は現在も受け継がれており、私が昨年、筑摩書房から刊行した『隠された聖徳太子——近現代日本の偽史とオカルト文化』も、まさにこの潮流の影響のもとに生まれた一冊である。いまや私を含め、東北大学にも大学院レベルでこのテーマについて指導可能な教員が複数在籍し、関連課題に取り組む院生も何人もいる——二〇年前には、想像すらできなかった状況であろう。

怪しげなるものは正なるものごとく、正なるものは怪しげなるものごとくなり。すなわち、「オカルトの世界」は、この社会の鏡として生み出され、それと表裏一体をなすものとして構想されているのである。この照応こそに学術的な可能性を感じ、語り合いたいと考える方には、ぜひ canase.com にて我々の研究ネットワークの諸企画を案内したい。

(おりおん くらうたう・東北大学大学院国際文化研究科准教授、専門・日本宗教史・史学史、二〇一〇年東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了・博士(文学))



γ 星

顕微鏡で見る古生物学

黒 柳 あずみ

今、この冊子を手にして下さった方が、古生物学者と聞いて思い浮かぶイメージとはどんなものだろうか？有名な恐竜映画「ジュラシック・パーク」や、砂漠で発掘調査をしている人の姿が思い浮かぶかもしれない。はるか昔に地上から絶滅した巨大な恐竜達はロマン溢れ、心惹かれる存在である。恐竜達が存在していた白亜紀はどんな地球だったのだろうか？そして白亜紀から今まで、さらに未来の地球はどのように変わっていくのだろうか？これらの疑問への手がかりをくれるのが古生物である。残念ながら恐竜はすぐに発見できないし、もう絶滅してしまった。一方で、知名度や大きさでは恐竜よりはるかに下回るが、環境解析では抜群の有用性をもつ古生物のグループ、それが「微化石」である。

微化石は、一般に顕微鏡で観察できる程度の大きさの殻を持つプランクトンなど(一部は海底に生息)の化石のことである。過去の環境の研究で、よく微化石が使わ

れている大きな理由の一つは、殻を持つため、その殻が生息当時の環境を記録したまま化石として残るからである。もう一つの理由は「微」化石である故の、普遍性（入手しやすさ）である。恐竜の化石は、日本で全身の一部でも発見されれば間違いないがニュースになる。一方、微化石の多くは海洋プランクトンであり、海であれば熱帯から北極・南極まで生息しているので、一握りの堆積物から何千、何万個もの化石を見つけることができる（もちろんニュースにはならない）。例えば、海底でボーリングコアを掘り、十センチメートルごとに微化石を調べれば、五千万年前の水温が五万年ごとにごう変動していたかがわかるのである。

では昔の環境変化を知ることが何になるのだろうか？理系の温故知新とは此は如何に。地球環境は今よりも暑い時代（白亜紀は北極に氷床はなく、二酸化炭素濃度も現在の二一〇倍ほど）や寒い時代（わずか二万年ほど前の最終氷期最盛期では現在の二酸化炭素濃度（約420 ppm）の半分以下（約180 ppm）を何度も経験している。産業革命以降、人間活動により大気中の二酸化炭素は急増し、さらにこの先も増加する見通しである。この急激な温暖化で地球上の生物はどのように応答するの

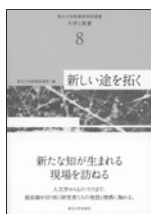
か、ということ、現実の地球の環境を変えて検証することはできない。しかし、例えば温暖な白亜紀の地球システムを詳しく調べることで、現在と違う点・同じ点は何か、どのメカニズムが働くとその違いが起きるのかなどのヒントを見つけることが可能である。

最後に実際の研究を紹介したい。筆者が研究対象にしている微化石は「有孔虫（ゆうこうちゅう）」である。この有孔虫を使い、過去の地球環境を精密に復元し、最終的には、将来の環境予測に役立てることを目標としている。有孔虫の有名な仲間には、沖縄土産で知られている星砂（大型底生有孔虫）がいる。蛇足であるが、浮遊性有孔虫は球形のフォルムが大変可愛らしく、また白亜紀末のダブルキール型はスタイリッシュな魅力で熱烈なファンも多い。話を戻すと、水温が何度なら殻の化学組成がどうなるかを厳密に調べるためには、飼育実験をする必要がある。なぜなら、自然界では朝や夜で水温が変化するため、ずっと一定の水温に保つためには飼育実験が有効である。飼育実験に必要な活きの良い有孔虫はダイビングで採るため、実験のために潜水士の資格やダイビングの免許も取った。また季節変化を知ること重要である。なぜなら、ある種が夏に増えたら夏の気温、冬

なら冬の気温を記録しているため、殻の気温がどの時期なのかを見極める必要がある。これにはトランプ観測で、何週間もの乗船を要する。このように様々なアプローチから過去に迫るのは一見地味かもしれないが、推理小説の探偵のようで大変楽しい。以上、古生物学のスター恐竜とはまた別の、緑の下力持ち、環境と時代決定ならお任せの微化石の世界を少しでもご紹介できたら、幸いである。

(くろやなぎ あずみ・東北大学学術資源研究公開センター准教授、専門・古生物学、二〇〇四年東北大学大学院理学研究科博士課程後期修了)

東北大学教養教育院叢書 大学と教養8 新しい途を拓く



東北大学教養教育院 編 領域・分野を問わず新たな方向性を示す研究を先導する9名の執筆者が、それぞれの研究の意義や面白さを語る論考集。

A5判・二三六頁 二七五〇円(税込)



δ 星

私の本棚

漢文の風景を訪ねて

五十子 幸 樹

昨年、中国の知り合いの先生方に講演を依頼され、蘭州、武漢、上海を訪問する機会を得た。中国は何度も訪れており、講演や会議の合間に様々なところを案内してもらえることをいつも楽しみにしている。各地の博物館などを案内して頂けることがあり、そこで出会う漢文をその土地の雰囲気と共に鑑賞しながら地元の先生方と話している、学問的なことや、技術的なことだけ議論している時よりお互いの距離が縮まり大変有意義だ。

蘭州理工大学にて講演のため、シルクロード交易拠点の一つであり、また中国の母なる川黄河が流れる蘭州を訪れた。建築・土木工学や、耐震工学に関係した研究がされている複数のグループの先生方や学生さんたちと交流する中で、王維の「元二を送る」という別れの漢詩の話が度々出てきた。蘭州で詠まれた詩ではないが、黄河沿いの柳を眺めながら歩いていると起句・承句の「渭城の朝雨 輕塵を浥す／客舍青青 柳色新なり」に通ず

る雰囲気が無いでもない。夕食にお招き頂き、「君に勧む更に尽くせ 一杯の酒」という転句さながらに先生方と白酒を酌み交わす。蘭州を去る頃には「西のかた陽関を出ずれば故人無からん」という結句の寂しさが蘭州という地の雰囲気と共に沁み入った。

大学受験のために買って持っていた分厚い漢文の参考書を捨てずに今も本棚に飾っている。大学受験から解放されても、いつかゆつくり読んでみたいと思いついてあった。帰国して早速この参考書を紐解いてみると王維の詩の詳しい解説が載っていた。高校時代は楽しむどころではなかった漢詩が、その風景に触れた途端に生き活きと息を吹き返したようだ。より興味が募って買い足した漢詩の解説本が本棚を賑わす。

武漢は新型コロナウィルスで不名誉な形で注目されてしまったが、湖北省の東部において、長江とその最大の支流漢江の合流点に位置する大都市である。理工系に強い華中科技大学があり、私の研究室で学位を取得した元留学生が教員を務めている。その教え子に誘われて初めて武漢を訪れた。講演の後、黄鶴楼に案内してくれると言う。もともとは、長江沿いに建っていたそうだが、現在では一キロメートルほど離れた長江東岸の蛇山山頂に

再建されている。楼閣に登り長江の眺めを楽しむ。内部には、もともとの黄鶴楼の再現模型や、黄鶴楼に関係する漢詩が解説と共に展示されている。黄色い鶴に乗って去っていった仙人の伝承は、唐代七言律詩の最高峰と評される崔顥の詩の中に織り込まれていた。長江を眺めながら、よく整備された楼閣の周辺の雰囲気を楽しんだ。少しばかり黄鶴楼にまつわる漢詩を鑑賞・理解する努力をしてみて、より楽しみが深まった。

上海では、同済大学の嘉定キャンパスで開催された土木工程院の百十周年記念式典に参加し、関連して開催されたフォーラムでレクチャーを行った。式典の次の日に四平路のメインキャンパスに移動するまでの間に時間があつたので、知り合いの若い先生にお願いして嘉定孔廟、科挙博物館を案内して頂いた。様々な漢文が展示してある中で白文のまま読めそうなものを探していたら、論語学而第一「子曰、学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来。不亦楽乎。人不知而不慍、不亦君子乎。」を見つけた。孔子の言葉の通り、懐かしさの混じった感動があり悦ばしかった。

昨年の中国訪問を通して、日本人の心に、あるいは教養の中に深く、漢文から学んできた思想や文化が根付き、

息づいているのだなと改めて認識した次第である。

(いかご) こうじゅ・東北大学災害科学国際研究所教授、専門・耐震工学、二〇〇五年京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了)

東北大学災害科学国際研究所編

東日本大震災からのスタート

災害を考える51のアプローチ



あの日、何が起きたのか。あの日から、何が変わったのか。多様な領域の専門家たちが論じる、被災地発の災害研究の現在地。

B5判・二三四頁・三三〇〇円(税込)



ε 星

帰郷―「若手研究者出版助成」から

無限の暴力と無限の救済

上野 友也

若手研究者出版助成を受け、『戦争と人道支援——戦争の被災をめぐる人道の政治』を二〇一二年に刊行した。この助成を得て本書を出版したことにより、私の研究人生の方向性が定まったといつてよい。それゆえ、この助成は単なる金銭的支援を超えた意味をもつものである。今後も東北大学における若手研究者の振興のために出版助成が継続されることを強く願う。ここでは、本書の執筆にあたり私を取り組んだ問題と、それをどのようにに思索し深化させてきたのかを簡潔に述べたい。

『戦争と人道支援』は、無限に続く暴力に抗い、無限の救済を追求してきた人々の闘争を描いたものである。具体的には、戦争の犠牲者を救済してきた人道支援の歴史と現状を考察した著作である。本書の執筆を通じて、私はなぜ人間は他者に暴力を行使するのかという問いを抱き続けてきた。この疑問は、現在の研究にも通底するテーマである。暴力のない世界が幸福であることは誰も

が理解しているにもかかわらず、暴力のない世界はいまだ実現していない。人間が誕生して以来、さらにはそれ以前の動物の時代から、人間は他者を殺害してきた。その動機は多様である。怒りや嫉妬、復讐や報復、金銭や財産の略奪といった個人的な動機に加え、政治的な要因も少なくない。国家の秩序を維持するために、弾圧や拷問、処刑といった暴力が正当化されてきた。国家間の領土や権益をめぐる戦争も絶え間なく続いてきた。歴史が証明してきたように、人間は決して暴力の手段を完全に放棄することはなかった。今後も人間が存続する限り、暴力は無限に行使され続けるであろう。

しかし、人間は暴力を行使してきただけの存在ではない。暴力に傷ついた他者を治療し、援助し、救助する存在でもあった。他者への救済、つまり他者を助けるという利他的な行為こそが、人間社会を存続させる推進力となってきた。一九世紀後半には、戦闘員の動員規模の拡大と戦闘技術の向上により、多くの兵士が死亡し負傷するようになった。この状況を受け、軍隊の医療部隊が整備され、赤十字国際委員会が設立されるなど、負傷兵の救護が本格化した。二つの世界大戦では捕虜や民間人の犠牲者が増大し、その反省を受けて国際人道法が段階的

に整備された。このような犠牲の拡大を受けて、戦場における人道支援の活躍も飛躍的に増大してきた。戦場での人道支援は、人間を殺してもよい存在として認識するのではなく、人間を生きるべき存在として尊重する。暴力は人間の生存に対する否定であり、救済は人間の生存に対する肯定である。暴力をより大きな暴力で制御しても暴力の本質は変わらない。それゆえ、暴力に抵抗するために、暴力ではない方法を用いるほかない。そこで、人間は暴力に抵抗するために、他者に対する救済を実践してきた。人道支援は、その一例である。しかし、暴力は、救済の希望を挫くほどに圧倒的な破壊力をもつ。人間は暴力に無力である。だが、一九四五年夏、広島に核兵器が投下された直後から、被爆した医師や看護師が被爆者を救助するために懸命に闘ったことは、人類の記憶に永遠に残されるべき事実である。人間による暴力は、人間が生存する限り無限に続くであろうが、それでもなおその暴力に対抗し、被害者を無限に救済することこそが、人間が存続するための唯一の方法である。

本書の刊行から一三年が経過したが、戦争による苛烈な暴力は依然として止むことがない。ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルのガザ地区への攻撃、その他多

くの紛争地域での暴力がその例である。その一方で、戦争の犠牲となった兵士や民間人を治療し、援助物資や避難所を提供する人道支援活動も拡大し続けている。戦争のない時代、すなわち戦場での人道支援が不要となる時代の到来を願い、今後とも研究を進めていきたいと考えている。

(かみの ともや・岐阜大学教育学部准教授、専門・国際政治学、二〇〇七年東北大学大学院法学研究科後期課程修了)

上野友也 著

戦争と人道支援

戦争の被災をめぐる人道の政治



戦争の被災者は、いつどのように救助されるようになったのか。人道支援の歴史とその理念を追うことにより、戦争における人道支援がどのように発展してきたのかを解明する。

A5判・二五六頁 三三〇〇円(税込)

第七回(二〇一〇年)東北大学出版会 若手研究者出版助成刊行図書

書評

佐藤透著、東北大学出版会

二〇二一年三月刊行



と星

『質的知覚論の研究―世界に彩りを取り戻すための試論』

信 太 光 郎

宮沢賢治は「詩人」であると同時に一個の「サイエンス・チスト」たらんとしていたと、佐藤透氏は本書『質的知覚論の研究―世界に彩りを取り戻すための試論』において紹介している。そうした賢治の志は著者の探求の指針を与えるものである。ただし著者が「哲学者」として引き受ける役割は、一種の道案内役といってよいと思う。本書の前半部では、知覚を理論的に説明することが、いかに落とし穴の多い険しい道程だったかが丹念に検討される。とくに近代の科学的知覚論は、知覚を説明しようとして、結局は眼前の「この」リアリティーを取りこぼしてしまふ。著者の論の進め方は、同じ轍を踏まないようあくまで慎重で着実である。その議論の中から特に重要と考える論点を自分なりに検討することで、書評に代

えたいと思う。

本書の後半部、科学的知覚論の困難に対する著者独自の処方箋が示されるところで、その困難の由来が、知覚の説明に混入された余計な観念であることが鋭く指摘される。例えば、暗闇で灯りをつけたときに物が見えることは、知覚の持続のうちに何らかの「変化」がもたらされ、それが「検出」されたのである。しかしそれをあたかも知覚作用が「発生」したかのように考えるのが科学的な知覚図式なのだ。科学的知覚論はそこに、それ自体は知覚的ではない、知覚の「原因」なるものを観念的に想定してしまう。そうした誤謬においては、デカルト以来「網膜像」という観念が大きな役割を果たしてきたことを、著者は説得力をもって示している。

さて、知覚を「変化の検出」の作用に差し戻そうとする著者のアイデアから考えさせられたのは次の点である。変化や動きは、知覚の対象だけではなく、知覚者（知覚場）そのものにも問われうるはずである。例えば知覚者の空間的な運動が、知覚される音や光の質を変化させることはよく知られている。世界の変化を検出するとき、同時に知覚者の運動や変化（その不変化もふくめて）もいわば「知覚」されており、それらが一体となって「変

化の検出」となっているというべきだろう。著者はこの変化の検出というアイデアにおいて、知覚に関する一人称の「縦描写」と、知覚因果的な三人称の「横描写」を適切に重ね合わせる方法を模索しているが、そこに知覚者の「動き」という契機を組み込むことにおいて、論証はさらに立体的になるであろうと思われる。

さてしかし、知覚者の「動き」はなにも空間的なものとは限らない。著者の信号の例に倣って、ここでは赤信号に引っかけたてしまいい停車している場面を考えてみる。そこに赤い光線の相対的な持続が検出（知覚）されている、というだけで果たして十分であろうか。知覚者が知覚している「赤色」は、警告という意味をもっており、知覚者はそれを（青色への変化を予料しながら）イライラと見つめている。そうした「心の動き」をはらんだ赤色の知覚を、知覚因果的な説明と重ね合わせる道は拓けているだろうか。例えばそこに心理学は役目を果たすことができるだろうか。この点は著者とともに考えてみたいところである。

最後に、これは著者の考えと食い違うところだと思いが、「動き」としての知覚には、「誕生と死の間」（ハイデガー）に限界づけられた「生の動き」が関与するとい

えるのではないだろうか。著者は、知覚図式に始まりと終わり（誕生と死）という観念を持ち込むことを、あくまでも一人称と三人称の誤った重ね合わせ方だと考えている。しかし著者の結びの言からは、われわれが生きて知覚している「この」リアリティーを、いわば一人称でもあり三人称でもある人間の「実存」を通して捉え直すという課題の方向性が示唆されているようにも思われる。著者の今後の研究を期待したいと思う。

（しだ みつお・東北学院大学教養教育センター教授、専門・哲学、二〇〇八年東北大学大学院文学研究科博士課程後期三年の課程修了）

佐藤 透著

質的知覚論の研究

世界に彩りを取り戻すための試論



科学的知覚図式とそれに抵抗する
質的知覚論の歩みを丁寧にとどり、
後者の再構築を試みる哲学書。

A5判・二五〇頁 三三〇〇円(税込)



7 星

東北大学出版会だより 38
なぜ研究者はジョギングし
たほうがよいのか

後藤 武俊

東北大学出版会の理事となつて一年が過ぎた。出版会の理事・編集委員は、基本的に月一回の出版会議に参加し、出版企画や出版会の運営状況について審議することが仕事である。出版会議はオンライン形式で、ほとんどの場合は自分の研究の椅子に座つて参加する。議論が長引けば一時間以上、座つたままとなる。

おそらく文系・理系を問わず、研究者というものは運動不足になりがちである。研究のアイデアを練るのは歩いてもできるが、それを形にする際は手を動かして文字化しなければならず、ここで座らざるをえない。文献を読むときは静かに座つて読むであらうし、長期にわたるフィールド調査をおもな研究方法にしていたとしても、そこで収集したデータの分析は座つて行うことになる。論文執筆の段になれば座りっぱなしである。座り仕事の最たるものである。

すると何らかの方法で意識的に体調管理をすることが必要になる。私の場合はジョギングである。平日は週三回、五キロメートルほど近くの公園を走ってから車で出勤する。これで心身ともにリフレッシュして仕事に向かうことができる。週末は、天気や季節にもよるが川沿いの道を中心に一五〜二〇キロメートルほど走る。心地よい疲れが残るので、夜にはこれをビールで癒す。美味しいつまみなどもあれば最高の週末である。こんな生活を一〇年以上続けてきたこともあり、まもなく五〇歳を迎えるが今のところ持病は一切ない。そんなに走りたいなら走って通勤したらいいと言われたこともあるが、自宅から職場まで七キロメートルほどの距離があり、しかも八木山を越えるあいだに汗だくになってしまうので、清潔を保つためにも通勤は車にしている。

このようにジョギングを習慣にしていると、他にもいいことがある。一つは研究がはかどることである。特に、論文の構想段階でアイデアが煮詰まってしまった時などに最適である。ゆっくり走りながら、行き詰まった部分をもう一度ゼロベースで書き直すとどんな文章になるかを考えてみたり、使えそうな理論を頭のなかで図式化してみたりするのである。すると、暗がりの中で彷徨って

いたところに突然光が差し込み、進むべき道を指し示してくれるかのように、アイデアがまとまる瞬間がある。こうした経験は一度や二度ではない。たとえば数年前、依頼論文の締切が迫るなか、学内業務に追われて何を書くかも決まらず焦っていたときのことである。計画年休に入ったところで、まずはひたすらアイデアを手帳に書きなぐった。確か三パターンくらいは書き出したと思う。そのあとでジョギングに行き、あれこれ考えるうちに、文章の書き出しと論文全体を貫く図式化のアイデアが無い降りてきたことがあった。そこから一気に書き上げ、無事締切に間に合わせることでできた。恐らく座ったままでは永遠にまとまらなかっただろう。ただし、走っているときに湯水のごとくアイデアが浮かんでくるという訳ではなく、煮詰まるまで文献やデータを読み込んでいることが大前提であり、そこに締切という条件が加わったときにようやく何かが「舞い降りて」くる、といったほうが正しい。

もう一つ、ジョギングを続けていると、マラソン大会に出たくなることである。これは本当である。「趣味はジョギングです」と言えるようになる頃には、「仙台ハーフに出たりするんですか?」と尋ねられることも多くな

る。「今度一緒に出ましようよ」などと誘われたりもする。「ハーフくらい誰でも完走できますよ」と言われれば、もうエントリーするしかない。ここまでは「出ざるをえなくなる」流れであるが、一度参加してしまうと、次からは自分から「出たくなる」。なぜなら、普段のジョギングでは味わえない達成感と高揚感が得られるからである。何より、完走後のビールのうまさは格別である。そして、一度参加すれば、次は前回より少しでも早いタイムで走ろうと思うようになり、ますます日々のジョギングにも身が入ってくる。

もちろん、研究者の本分を忘れるほど走ってばかりいでは本末転倒である。それでも、時に精神的に追い込まれ、運動不足になりがちな研究者にとって、これほどよい趣味は他にないのではないかと、末席ながら思うのである。

(三)とろ たけとし・東北大学大学院教育学研究科准教授、専門・教育行政学、二〇〇六年東北大学大学院教育学研究科博士課程後期三年の課程修了)

科研費による出版を承ります

科学研究費助成事業の「研究成果公開促進費（学術図書）」を利用した出版をご検討の際は、ぜひ小会事務局までお声がけください。「見積書」「発行部数積算書」の作成を承ります。

〈実績例〉

★令和五年度 内藤真帆著 『Tumbuk-Bislama-English Dictionary』

★令和三年度 滝波章弘著 『地域が創る「あさか舞」
ー福島県郡山ブランド米の産地像ー』

★平成三〇年度 西田文信著 『ナミイ語文法の記述言語学的研究』

高橋秀太郎・森岡卓司編 『多文化共生社会の構築と大学教育』

「文学・文化運動・地方雑誌」

★平成一九年度 尾園純一著 『パーニが言及するヴェーダ語形の研究
ー重複語幹動詞を中心にー』

学術出版をお考えのみなさまへ

専門書、教科書、教養書、入門書、学会へのプロシーディングなどの出版をお考えの方は、ぜひ小会宛にご連絡ください（連絡先は表紙面参照）。日本学術振興会科学研究費補助金や東北大学若手研究者出版助成の申請などを含め、ご相談を承ります。

「宙（おおぞら）」第三十八号もとても充実した内容になりました。御執筆くださったみなさま、ありがとうございます。拝読して、私は、この世界で、人が身体を持って生き、思考を重ね、更新し続けることのしくみと意味について考えさせられました。食生活の拡充、進展が、有意の因果を精細に捉える不断の努力に支えられていることがあらためてわかりました（ α 星より）。「怪しげなもの」への関心と、合理性を指向する科学の展開との相関が、人の心と社会の深層を知る上での重要な課題になることも理解できました（ β 星より）。恐竜よりもはるかに微小な有孔虫等の「微化石」の調査に、数千万年もの地球環境の変動を解明し、将来の環境予測に生かすという壮大な可能性があることを学べたのもうれしかったです（ γ 星より）。先端的な工学を推進する国際交流の場に、日本人の教養に深く根づいた千年以上の漢詩文の表現が得難い妙趣をもたらしことにも深い感銘を覚えました（ δ 星より）。世界に、あつてはならない戦闘が起こり続けてしまう限り、その抵抗策が暴力に傷ついた人の救済であり続けることを痛切に知るのも、過去を省みて今を生きる上でたいせつであると思いました（ ε 星より）。また、知覚とは何かを根源的に問い、考えることの重要性と困難さに接するのも、自身の思考を捉え直す重要な契機になると感じました（ ζ 星より）。そして、身体を適度に動かし、身と心を結ぶ多様な感覚を喚起し、思考を更新するという連環を意識できたこともありがたく思いました（ η 星より）。

本号の七星の文章からも、この世界に生きることのさまざまな意味を感じ取っていただければと存じます。

（佐倉由泰）

宙

内

容

（おおぞら）に輝く北斗の七つの星に寄せて、

東北大学出版会が読書人に贈るエッセー

第三十八号

α 星

自著を語る／『豚肉の生産科学』／鈴木啓一（宮城大学客員教授・東北大学名誉教授）

β 星

日本オカルト史研究へのいざない／オリオン・クラウタウ（東北大学大学院国際文化研究科准教授）

γ 星

顕微鏡で見る古生物学／黒柳あずみ（東北大学学術資源研究公開センター准教授）

δ 星

私の本棚／漢文の風景を訪ねて／五十子幸樹（東北大学災害科学国際研究所教授）

ε 星

帰郷―「若手研究者出版助成」から／無限の暴力と無限の救済／上野友也（岐阜大学教育学部准教授）

ζ 星

書評／佐藤透香、東北大学出版会 二〇二一年三月刊行

η 星

『質的知覚論の研究―世界に彩りを取り戻すための試論』／信太光郎（東北学院大学教養教育センター教授）

東北大学出版会だより38／なぜ研究者はジョギングしたほうがよいのか／後藤武俊（東北大学大学院教育学研究科准教授）